Tsukuba Psychological Research
1991, **13**, 219-224

心理臨床家のためのレヴィンの遺産
Ⅱ．心理治療ライン

筑波大学心理学系　台　　利夫

The Lewin legacy for the clinical psychologist II. Psychotherapy line

Toshio Utena (Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)

Lewin's ideas were more or less, even if not pivotal, influential in various kinds of group psychotherapy. There were group therapists in different standpoints who denied the above fact. Moreno once condemned Lewinians in that, after he had initiated dynamics of group structure like psychodrama-sociometry theory, they began to write similar articles, having the stamp of Moreno's thought. But modern trends from group dynamics to general system theory on group psychotherapy will dissolve developmentally some kinds of inter-critical relation between Lewin and Moreno.

Key words: group dynamics, psychodrama, general system theory

場・ゲシタルトと心理臨床

Lewinの理論とその系譜を顧みると，それはまず場における人の認知のあり方を強調するものであった．この考えはLewinの後継者やゲシタルト理論の親和者のみでなく，他の理論を拠りどころとする現代の心理臨床家―診断家や治療者にもかなりの影響を与えている．たとえば，名称上は酷似するゲシタルト療法のPerls（1973）について見よう．ここで名称上としたのはPerlsの立場はゲシタルト理論以外に精神分析的視点も含んでいるからである．彼は第一に認知における「地と図」の関連を人の心構えの全体にわたって追求する．また第二にLewin的な「境界領域」の考えをとる．第三に「今，ここで」の認知を重視する．そして第四に氣づかれぬものへの「氣づき」に注意する．Perlsによると神経症は自己自身と世界の残りの部分の適当なバランスを見出せないこと，自分と社会の間の境界領域が自分の内部にまで過度に拡がっている―地の図への浸蝕―と感じることから生じたものである．そこで治療者は患者に対して，ある問題について感じを語ることよりもその問題そのものを今の治療の場で再体験することを求める．かくて患者は気づかぬものに「気づく」のだが，この氣づかれぬものは精神分析的な無意識をも包括する，まさに今，気づかれていないということである．

Perlsの挙げた4つの留意点はそれぞれ別個に臨床研究者達によって浮彫りにされている．1つ目の「地と図」の関連は，かって精神医学者の西丸(1948)が幻覚の解説に利用したことがある．「これらの現象は地から図の際立ち方の異常であると考えられる．中心の図がうすくなり，辺縁の図が何かの意味で濃くなり，あるいは性質が変わってきている」という．精神医学は精神病理現象の解説にしばしば当代の主要な心理学説を援用したがここではゲシタルト心理学が引用されたわけである．

他方，2つ目の「境界領域」の問題については，自我境界を論じたLandis（1970）が精神分析との対比でLewinの生活空間の考え方を一層大きく参照している．彼によると自我境界という言葉には二つの概念がある．一つは自我意識について意識に現れないパーソナリティの側面からの区別であり，もう一つはその人の外側にあって，心理的にのみ経験されているような現実の世界からの区別ということである．そしてLewinの境界領域は（内的緊張体系の境界と相即するものではあるが）二つ目の意味での自我境界に当るのである．

3つ目の「今，ここで」の認知について，これを

欠くことのできないものとして強調したのはRogersのクライエント中心療法であろう．ここでは知覚の再体制化こそ臨床の場で生じる重要な過程と見なすのだが，Rogers（1947)は「行動の決定要因として現在の経験の場が強調されるが，それはゲシタルト心理学およびLewinとその弟子たちの業績と関係があることは明白である」と述べている．

Rogersの理論ではまた無意識との関連も検討せねばならない．クライエント中心療法の技法の一つである明確化はPerlsの4つ目の留意点：気づかれぬものへの「気づき」に似ているが，精神分析の“解釈”の範囲のとり方によっては解釈と重なり合う面がある．Weiner（1975）はこの点をとりあげて両者の区別に氣を使っているけれども，遡って顧みるとこれはゲシタルト心理学とくにLewinの理論と精神分析の間の問題でもあるのだ．実際，Lewin（1935）も現時点での認知を強調する一方で部分的ながらも緊張体系の内容に触れて，それが歴史的なものであることを認めている．「今，ここで」の認知は過去の歴史を収斂したものだが，しかし内部体系の内容も誘発される行動に効果を及ぼすとなると精神分析の転移の体験に近づくことになる．精神分析でも今日では転移状況で語られることがもはや単に過去の反復だとは認めず，現在の治療者―患者関係を重視しており，「今，ここで」の体験を無視できないと認めているのであるから，両者が重なり合う部分は一段と大きいことがわかる．しかもLewinの内的領域も精神分析も行動の誘発に緊張―緊張解消モデルをとっている点では同じである（Maddi，1972)．理論の基礎を異にしながら重なり合う面をもつ両者に共通の広場を与えるには両者を再統合し，それぞれに新しい位置づけをする統合的な視点が必要になる．従来の心理療法で基本の枠組とされた心理力動と認知と行動（Karasu，1977）の諸側面に加えて“関係”の視点がとられるようになったのはこうした背景に基づいているだろう．

モレノの批判

“関係”の視点は集団力学と集団心理療法の場で特にとり入れやすかった．心理治療集団の各参加者はまず他人とのコミュニケーションを学習する．それは主として言語によってなされるが，あわせて身体行為をはじめとする非言語的交流が治療上に重要な機能をもつ．実際，言葉を発しないでも集団の中にいるというだけで，隣りの，あるいは対面する複数の他者の存在が特定の関わりを成立させるのである．

集団心理療法の実践の中で関係というものに豊かな意味を与えたのはMorenoである．彼の思想においては集団メンバー間の関係の診断法としてのソシオメトリーと治療実践としてのサイコドラマがしっかりと結びついていた．彼によれば(Moreno, 1953)，インターパーソナルリレーションなる語は本来の出会いmeetingの意味を失っている．“出会い”とは複数の行為者が遭遇し，単に顔を合わせるだけでなくてお互いに体験を分かち，生活を共にするところで生まれる．各自がそれぞれ生活行為者として自発的に関わり合うことなのである．こうした基礎に立って進めた集団治療法がサイコドラマである．

MorenoはかってLewinに対する大いなる批判者であった．Lewinの理論に対しては，既述のようにかねてから批判があったが，Morenoのそれはこれらのものとはいくらか異なっていた．Morenoも個人の行動がそれ自体としては成立たず，その人の属する集団や社会との関係において生じるのであり，個人は常に集団の中の個であるという．そして特に個人が社会で担う役割は一方でその人の自我が関わり他方では社会が関わるから，個人と社会を結びつけるブリッジである．とくにサイコドラマでは舞台上で主役が他の演者と共に演じる場面には観客集団も参加するが，その場合，観客の座るフロアーは社会を現しており，舞台上の演技のやりとりは社会の中での活動場面を意味している．つまり社会場面と個人の活動場面の密接な連関を示唆している．場面の演出者であるサイコドラマの監督がある個人にいきなり役を割り振ろうとするのではなく，まず社会生活上の課題場面を構成することに努めるのもこの点に基づいている．

上記のようなMorenoの考え方は，役割概念の導入は別としても，Lewinの場理論と著しく似ている．この似ている点が彼には快くなかった．Moreno（1953）は次のように述べている．「…それにしてもLewinの集団力学はひどいものだ．ゲシタルト心理学やトポロジー心理学からそれへの展開は明らかに私（Moreno）に負うものである．それなのに彼の弟子達(実はそのある者は私の弟子でもあるが)は両者には相互的な依存があったなどと言っている．私はLewinをビーコン（かってのMorenoの本拠地）やニューヨークの私の仕事場から排除する．Lewinが私に頼ったと見られる点が三つある．第一に，彼の集団力学研究センターは意識的・無意識的にソシオメトリック研究所をモデルにしていること．第二に，彼の理論と彼の集団力学における実際的な研究業績の間のくい違い．そして第三に，彼の弟子の多くは口先でトポロジー理論に同調していた

だけで，実はソシオメトリーに頼っていたということである．Lewinが死んですべては終りになった」．

確かにMorenoの挙げた第二の点―認知理論と集団力学研究の間は，人と環境の関わりに注目すると問題が多い．だが彼のLewinへの感情的な攻撃はむしろアメリカの心理療法学会でサイコドラマが当時十分に市民権を得ていなかったことへの反発を示している．だがその類似性について言えば，（彼がLewinに対して述べたように）Morenoが死去してからは反発も終わり，二つの立場は種々の面で絡み合うようになる．

アメリカでの最近の両理論の統合への動きを探る前に，かって日本ではより以前にこうした方向への始動があった．日本にサイコドラマを紹介したのは若い時代にゲシタルト心理学を学んだ人々―松村康平や外林大作である．例えば外林の初期の著作（1958）にはサイコドラマを場理論によって読み換える試みが見られる．「…ロールプレイングにおいては『洞察』は個人の知的能力によるのではない．対人関係という一つの関係が『洞察』を起こす力をもっていると仮定しているのである．…葛藤を解消しようとする均衡化しようとする心理的な力が働いていることを意味しているからである．…心理劇では，対人関係において葛藤を解決する，均衡化の力が対人関係そのものの中にあるからだということである」．この解説によってサイコドラマのもつ諸機能が網羅されたとは思えないが，注目されるのは1950年代に既にゲシタルト心理学的視点とサイコドラマ的視点の統合が志向されていたということである．

さて二つの立場の統合を媒介するものの一つとして一般システム理論をとりあげるのは有意味であろう．もともとMorenoは非組織的な実践に基づきながら固有の理論を練り上げてはきたが，サイコドラマの理論的構造はなお組立てられるべきボディの骨組ないしは枠組しかもっていないということが後継者達からもしばしば指摘されている（Boria, 1989）．そこで一般システム理論によってあらためて組立てなおす試みがなされるわけだが，元来この理論との関わりはMorenoがサイコドラマで家庭問題を取り上げた1920年代に既に始まっていたと言える．サイコドラマ場面は時にある種の家族療法と言えるのであり，現今，家族療法で論じられているシステム論の考えが，そうした用語は使われなかったにしても実践に移されていたという指摘がある（Guldner, 1983; Moreno, Z.T., 1987）．その後，サイコドラマについて理論的な整合性を求める者の中に明らかに“システム”という語を使う者が現れている．Keeney［Williams］（1989）では，こどもの家庭内暴力に疲れ切り，全く自信を失っている母親について，これは父母の間にも問題があること，父が全く子供への対処に不参加であることが認められた．そこでサイコドラマを通じて親としての共通の問題の提起がなされ，夫婦が協力して身体を張ってこどもに立向かう機会が与えられたことで解決した．この例は両親関係サブシステムの支持により，母親とこどもの心理的距離が増す一方，夫婦間の隔たりが減少したことによると解釈されている．一般に情報がどう受けとられるかは身体のシステムを含めて前提としてもつわれわれのネットワークにそれがどう合致するかに依存するが，サイコドラマでは常に主役は彼の固有の世界を他の人々と分ちもつように促される．この過程によってシステムの自律性の感覚が活性化し，新しい情報と新しい意味に向かって開かれるのである．

このような話は確かにサイコドラマが一般システム理論によって有意義に把握されることを示しているようにみえる．だがこれは既に家族療法においてなされているシステム論的な解釈の仕方のそのままの借用ではないか．また，他方，家族療法でのシステム論は一般システム理論を果して妥当な形で適用していると言えるだろうか．

元来，一般システム理論はその成立の素材の一つとしてゲシタルト心理学を採り入れている．Lewinの場理論はゲシタルト心理学に親和するものであるし，集団力学もそれと無関係ではない．こうした関連を顧みると，サイコドラマ，集団力学，一般システム理論の間を一層関連的に把握する必要が生じるだろう．

集団力学から一般システム理論へ

一般システム理論（Bertalanffy, 1968）がゲシタルト心理学に目を向けたのは，それが基本単位の総和ではなしに動的な法則によって支配される心理学的全体の存在と重要性を示していること，人間を受動的に反応するオートマトンやロボットとしてでなく能動的な人格システムとしてみることによる．この点を顧みる時，ゲシタルト分派であるLewinの集団力学を学んだ人々が一般システム理論に関心を集めたのは自然の成行きであったといえよう．だが集団力学と一般システム理論の間について検討する前に，まず集団力学と集団心理療法の関係について顧みなければならない．

現在，集団力学の研究といわれるもののほとんどは社会心理学的実験に基づいており，心理治療集団

を素材にしたものは少ない．そして臨床心理学者と産業心理学者・社会心理学者の交流もさほど多いとは言えないのである．しかし集団力学の概論書をひもとくと精神分析医Bion（1961）の神経症患者集団の集団臨床的研究だけはたいてい載せてあって，Bion自身はLewin的な意味で集団力学という語を用いたかどうかは不明であるが，彼の研究が集団力学と大いに影響し合った点が認められる．

Bionが全体としての集団の文化と呼ぶ，有名な三つの基本仮定―依存，相棒づくり，闘争～逃避は集団の構築作業（ワーク）を通じて成るものであり，集団は容易にこの基本仮定に沿って行動する．例えば，依存集団ではメンバーは専らリーダーに依存する行動をとるのでその中に自分なりの発言の機会をもちたい人がいても，その人には著しく困難な状況となる．彼はひとりでにリーダーのライバルになってしまう．いわゆる集団文化は実際にはさらに複雑であって三つの基本仮定は単純過ぎるきらいがあるし，この仮定が治療にとってとれだけ貢献したかとの問題点はあるが，集団力学的な関係―個人相互の関係の意味や全体としての集団が集団内個人の行動に与える意味を示唆した点では，後述するように確かに最近の集団心理療法の理論構成につながるものを持っている．

ところで集団力学は元来，集団の理論的研究のみでなく応用面の研究を目指しており，とくに職場におけるリーダーシップや凝集性や生産性の研究から集団過程の進展や人間関係訓練を促す集団的方法として発展していった．アメリカにおいて，その一つであるTグループ（Basic skill training group）は1964年にBradfordらが教育者のために開いたワークショップから発してやがて感受性訓練と呼ばれるようになった．一方，Rogersらの1946年のカウンセラー―養成ワークショップに始まったエンカウンターグループ＝EGも1960年代にはカリフォルニアを中心に大いに広まった．EGでは個人の自己理解，自己実現，自己成長が主要課題であったが，Tグループとの差異が次第に縮まってゆくとともに，他にも同様な目標をもつさまざまな流派が現れてEGまたは類似の名称の会合が各地でもたれるようになった（Siroka，1971）．これらは集団心理療法と異なり，患者ではなく健常者を相手にしていること，治療ではなく人格的成長を目指すこと，リーダーは治療者ではなくトレーナーとかファシリテーターと言われることなどの点が挙げられるが（Verny，1974），集団過程や集団機能など集団力学的な視点からすると両者にはかなりの類似が見られるであろう．

とりわけ注意を要するのは，本来Lewinの系列に属しない人々が集団力学をかなり重視していることである．たとえば精神分析を基盤にした集団分析療法を行うFoulkesが集団のゲシタルトに関心をもったり，EGの先駆者の一人であるYalomも集団力学に興味を示している．Foulkes（1975）は，集団の指導者の最初の仕事は個々の現象の意味を見出すのみでなくそれを適当な力学的セッティングに置くことであり，これはまさにゲシタルト理論に基づいて最もよく理解できると言っている．他方，Yalom（1970）はBionの理論的枠組みにおけるLewinの影響は明らかであるとしているが，EGの基本に関する彼の書の共編者Lieberman（1973）は集団療法モデルについてLewinとBionの影響を持続的に受けていた．種々の立場と集団力学の交錯が見られるこうした状況は，確かにこの理論の幅の広さを表しているが，理論的整合性より実用面が先行して，いささか便宜主義の感を免れない．

理論的にみると，個人の心理力動はそれが分析的集団心理療法の場で取上げられたものであるとしても，どうして集団力学に結びつくかということが検討されねばならない．この点の検討を続けてきた研究者の一人であるDurkin（1976）によれば，一般に集団心理療法家も最初は個人心理に，次いで集団に興味をもつが，生産集団などの集団力学を研究する社会科学者は個人機能よりも集団全体の性質に関心を集中するから，一方は他方の用語さえ理解できない有様である．だが集団の相互作用はメンバーのパーソナリティ（自我）の展開を通じて進行するから根本において全ての集団の力動的基礎は同じであるという．個人心理と集団活動の関係についてのこの説明はいささか大雑把であり，このモデルに合わない状態もありえよう．この点についてはDurkin自身も集団力学にとらわれ過ぎたと反省して，さらに一般システム理論を借用して説明することを試みている（Durkin，1983）．つまり精神分析学が先ずもって人格システムの構造と内容に注意するのに対して一般システム理論は内容に関わりなく諸システムのすべてにわたって構造を比較してつくられた．これまで集団療法家達は集団力学と精神分析の結合に努力しては失敗してきたが，元来この二文法は誤りであって両者は本質的には相同性をもっているのである．精神分析家は無意識を意識化しようとしたが，実はそれは終点ではなく人格の上位システムと下位システムの間のエネルギーや情報の一交換手段なのである．そして集団療法における複数メンバー間の転移的交流の分析はこのような過程を刺激するのである．

Agazarian（1981，1986）も一般システム理論をもっ

て個人心理と集団力学を関連づけようとする．ただし彼女の場合はDurkinのようにそのままストレートに両者を関連づけるものとしたのではなく，むしろこの理論を念頭に個人と集団の関係を細かく検討した上であらためてその視点の妥当性を確認した．Agazarianは自分の見方を多次元的思考と称している．この考え方は，まず治療集団内の個人の（Lewinの意味での）生活空間―環境認知をとりあげる．これには過去の集団での生活体験が効果を及ぼしているわけであるが，特にそれは本人が現在，その治療集団のメンバーであることをどう受け止めるか―どのようにメンバーシップをとるかということと関わりをもっている．しかもそのことは集団の中でいかなる役割を果たしうるかという点とも関係しているのだが，この役割は当該集団の他の集団との関係や周囲の社会との関係によって規定されるのである．つまり個人心理，メンバーシップ，集団役割は同時的に相互に関連するそれぞれの開かれたシステムから形成されるものとして捉え，システムの間の交流―情報のアウトプット・インプットは全生活空間（認知）の変化として生じるとする．この考え方によれば治療者は個人の“見える”行動の一つ一つに“見えない”集団の役割機能を見てとることができるのであり，個人の行動変容と集団発展とをあわせて進められる．

多次元的思考はLewinの場理論を一般システム理論に発展的に吸収し，心理力動と集団力学の対比を止揚するばかりでなく，治療者がこうした諸点に氣を配るように促すことで心理治療の実践にもつながる枠組を与えたものとして評価できる．さらにこの思考形式は通例の集団心理療法のみならずすぐれて家族療法の構造に当てはめることができる．個々の家族メンバーの心理とメンバーシップと家族内の役割は相互に力動的に関係するからである．

しかしながら，このように広範な適用性をもつ理論として練り上げられた多次元的思考も本来の一般システム理論とは重要な点で異なる点のあることを示唆しておかねばならない（台，1989）．ここでは同一人がさまざまな枠組で捉えられた上で，その枠組の間の相互作用が論じられているけれども，それと同時にそれぞれの枠組に関わるある種の物［または物に準ずるモノ（組織，制度，科学，技術などの諸文化）］：相対的な常態性をもった構成要素の間の関わりが注目されていない．元来，一般システム理論では細胞内化合物と細胞と生物体の間のように平衡流動の意味で常態性をもつ下位部分と上位部分の間の開放性を認めるものである．多次元的思考では集団力学に基づいて個人の認知とともに集団の行動を仮定して「見えない」集団をとりあげる．しかし実際には「見える」個体（人）やそれを取巻く人またはモノの集合体が実在し，それらが個体との関わり合いに基づく心理的枠組から種々の形で意味をもたされているのである．個にせよ集団にせよ身体で一定の物的場所を占め，他のモノとも共存する事態だからである．

Agazarianに欠ける人とモノの関わりへの配慮は，実はMorenoにおけるソシオメトリーのテレの概念には含まれている．テレは単に人と人の関係のみでなく，人がモノを求め，モノが人によって活かされる場合やモノとの転移関係をも含んでいる（Moreno，1953）．この点はソシオメトリーの思想を実践に活かしたサイコドラマで一層明瞭である．

BachはLewinの理論を心理臨床の分野で引継いだ者の一人であるが集団力学的研究を通じてサイコドラマを認め，儀式の重要性に氣づくようになったと述べている（Bach，1986）．彼は夫婦カウンセリングやMAPSを用いる演劇的遊戯療法でサイコドラマを導入して効果を挙げた．ここでいわゆる儀式とはサイコドラマにおいてある役割が演じられることであり，ある時は自発性を妨げ，ある時は自発性を促すような矛盾した性格をもつものである．そして自発性が儀式化された行動を通じて高められる治療の内外の多くの条件があるという．Bachのいう儀式は恐らく社会的な制度や役割にまで押し広げられるのであり，条件とされる多くのモノ的な要素と共に臨床実践の過程の中で集団力学とサイコドラマを結びつけることになったのであろう．

心理的な枠組に関連して意味づけられたモノ，そして人とモノやモノとモノの間の関係を治療集団のシステムに取入れることで一層統合的な理論をつくること―それは未だ十分には果たされていないけれども実践の面からすれば大いに期待できるだろう．

むすび

Lewinの理論はその系譜をたどってみても基本的に人の行動が認知に発するという点を踏むものであることを本論の前段において見た．認知が人と環境の間でとる機能は限られたものであるが，集団の生活空間―集団の認知という概念は環境それ自体と人の認知の間を媒介するものになるだろうと考えられた．ただし集団認知はかなり曖昧な概念であり，まさに人と環境の分かち難さを裏書きしている．

現代の諸集団心理療法理論もそれぞれ基礎を異にしながらLewinの考え方を多少とも取入れている．

だが今や一層統合的な理論が実践上の必要からも求められている．同胞葛藤的な間柄にあったLewin理論とMoreno理論も両始祖の没後は両派それぞれに一般システム理論を志向するようになって接近してきた．この理論によれば，人と集団と社会はそれぞれ開かれたシステムとして関わり合うが，両理論はシステムの内容に関して相補的に取込まれるべきであろう．それにより一般的な人と環境の関連も一段と明瞭になると期待される．

Lewin理論における，客観的事実過程（環境）と主観的心理的過程（認知）をつなげる“門”の位置に立つ人の機能についても，門番を社会的・文化的役割を担う者とみなすなら，当人の認知は多少ともその役割を与える集団の認知となり，これによって社会・文化的事実と関わるようになる．つまり物や事は役割知覚や役割行為によって意味づけられ，物や事は心理的でかつ物理・社会的性格をもたされると言えよう．そしてあわせて，本論の冒頭の提題として記した臨床心理学と精神医学との差異について顧みるなら，このように臨床場面を超えて広く生活世界を覆う一般的な原理により，臨床心理学は人の病理から出発する精神医学とは異なる特性を与えられるのである．

引用文献

Agazarian, Y.M. et al. 1981 The invisible and visible group. London: Routledge & Kegan Paul.

Agazarian, Y.M. 1986 Application of Lewin's life space concept to the individual and group-as-a whole system in group psychotherapy. In E.Stiver et al. (Eds.) The Lewin legacy. Berlin: Springer.

Bach, G. 1986 Lewin theory in clinical practice. In E. Stiver et al. (Eds.) The Lewin legacy. Berlin: Springer.

ベルタランフィL.長野　敬　他(訳)　1973　一般システム理論　みすず書房(Bertalanffy, v.L. 1968 General system theory. N.Y.: George Braziller.)

ビオンW.R.対馬　忠(訳)　1973　グループ・アプローチ　サイマル出版(Bion, W.R. 1961 Experiences in groups. London: Tavistock)

Boria, G. 1989 Conceptual clarity in psychodrama training. *Journal of Group Psychotherapy, Psychodrama and Sociometry, Fall,* 166-172.

Durkin, H.E. 1976 Toward a common basis for group dynamics: Group and therapeutic process in group therapy. In M. Kissen (Ed.) From Group dynamics to group psychoanalysis. Washington: Hemisphere.

Durkin, H.E. 1986 Some contributions of general system theory to psychoanalytic group psychotherapy. In M.Pines (Ed.) The evolution of group analysis. London: Routledge & Kegan Paul.

Foulkes, S.H. 1975 Group-analytic psychotherapy. London: Interface.

Guldner, C.A. 1983 Structuring and staging. Journal of Group *Psychotherapy. Psychodrama and sociometry,* **36,** 141-154.

Karasu, T.B. 1977 Psychotherapy. *An overview. American journal of Psychiatry,* **134(8)**, 851-863.

Keeney, B. 1989 Strategic psychodrama with individuals, families, and groups. In A. Williams (Ed.) The passionate technique. London & N.Y.: Tavistock/Routledge.

ランディスB.馬場礼子　他(訳)　1981　自我境界　岩崎学術出版(Landis, B. 1970 Ego Boundaries Psychological Issues, 24)

レヴィン，K.相良守次　他(訳)　1957　パーソナリティの力学観　岩波書店(Lewin,K. 1935 Dynamic theory of personality, N.Y.: McGraw Hill.)

Lieberman, M., Yalom, I.D., Miles, M.B. 1973 Encounter groups. N.Y.: Basic Books.

Maddi, S.R. 1972 Personality theories. Illinois: Dorsey.

Moreno, J.L. 1953 Who shall survive? N.Y.: Beacon.

Moreno, Z.T. 1987 Psychodrama, role theory, and the concept of the social atom. In J.Zeig (Ed.) The evolution of psychotherapy. N.Y.: Brunner/Mazel.

西丸四方　1947　幻覚　学術書院

ロージャズ，C.R.伊東　博(訳)　1972　パーソナリティの体制についての観察［伊東　博(編訳)ロージャズ全集第8巻　パーソナリティ理論　岩崎学術出版］(Rogers, C.R. 1947 Some observations on the organization of personality. American Psychologist, 2, 358-368)

シロカ，R.W.伊東　博　他(訳)　1976　グループ・エンカウンター入門　誠信書房　Siroka, R.W. et al. (Eds.) 1971 Sensitivity Training and group encounter. N.Y.: Grosset & Danlap.

外林大作　1958　人間関係とロールプレイング　心理劇研究　2

台　利夫　1990　心理劇的集団過程への多次元的思考の適用についての検討　その4　“一般システム理論”と“物の意味”日本心理学会第54回大会発表論文集　265頁

Verny, T.R. 1974 Inside groups. N.Y.: McGraw Hill.

—1991.9.30受稿—